911

てらっしゃるんでせう。」

「さア、どうしませうか、こゝから先き永く葬場の人として立つか、夫れとも今止める[僕は]かの決心が第一マが決まりません。寧そ有無の判決を受けて懲役へでも入つたら頭が刈り処で何方へ固まるも知れたらうと思ひます。」

「先ア、甚様な事をいふのです。」

「探事はどんな論告をなすつたのです。」

「探事はなか〳〵頭のある男らしかつたが、何さま世の内幕を知らないもんですから

半紙二〇（鮮業版下山田製）

敵

、陽桁君と清水君とに四ケ月の体刑、僅に一ケ月の体刑を科刑とました。

日先ア、エルナニ劇の公演者に四ケ月の体刑を科めたなんて事が、仏蘭西の新聞にでも通信されたら夫こそ日本の恥ワ。

日罪と罰に出て来るイリヤベトロギッチの様な悪鬼の意見書を出してあり

ましたよ。日本さんの教行してる新聞の商売敵と、劇場の高官敵と両方からの下らない投

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

413

書を材料に甚い事を書いてみましたネ。〻誇大の廣告をなし巨額の不當利益を貪りしなどいふ文句があつて、田舎君も名塚君も僕も皆な詐偽取財と云ふ眞名の下に署名してゐるんでせう。驚きましたよ僕も、〻〻〻〻〻〻〻〻〻詐偽取財の、〻〻〻〻〻〻〻〻〻

414

立てた者があつたら、夫れで
広告をして金銭を詐取した
ら……何しろ六百何十人と
ツト新手横着者を片ッ端
だからネ。其の証取書を
ましたが、中にはお話し
た連中があるんですもの、
はパタ〳〵と二百何十人
同じ筆もそっくりの
ですからうまく

415

「だって、詮方財とは餘りですわ。私が其のイリヤ・ペトロヴィッチは
ですもの、加藤の男に騙みつくやうな悪い男ですもの。悟
様もそうそう云ふ引っ掛かって引の色の黒い男ですもの。」

「人身攻撃は止しませう。」

「だって引はあのイリヤ・ペトロヴィッチは
ですもの。」(女房が亭主の悪口を言ふ時の口調)

「鬼にも泥棒にも(聖人にでも)
事。」

「鬼にも泥棒にも夫りやア美しい者は美しくて見える
のサ。宗いちやア無いですか、そんな事は。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

夜寝も寝ないで
事務に精勤な
さるそうです。
母親も喜んで
おられましょう。

と笑つたが、
急に思直した
やうに、

「なアに法律の運用なんて個人の感情でどうでもなるから、あの事件の主任がイリヤ、ベトロヒツチで無かつたなら、頭から叱上げな

「ええ、夫りやア、(ええ)
(ええ)
(ええ)

417

かつたかも知れないのサ。僕は最初イリヤ、ペトロギツチに調べられた時、こいつぶんなぐられて泣きながらワイ〳〵と思ひました。それから裁判所で検事に調べられた時は〳〵畏れ多なァ〳〵と感じましたが果して驚愕しました。

○本當に長うございましたカネ、そして湯桁さんや清水さんは何と云ふ罪名で一一一何ケ月の、ヒ

○清水君はサイセツト弁(べん)の署名人で、湯桁君(げたくん)は無行人で、二人共警察犯處罰令(けいさつはんしょばつれい)に由る

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

418

一行アキ

唯ウた二十はの拍留で濟みましたが、四ヶ月の懲役刑に対する二十日は甚だ限なのやうに思はれるが、夫れなつて未曾有氣の毒だネ。

二人は四阿のベンチに列んで腰を掛けてゐた。並径三尺ばかりの自然木の杉のテーブルに高木は頬杖を突いて時子の顔をぢろ〳〵と見てゐた。二分三分二人の間には沈黙が續いた。夕闇の中に男々しい白面が屑すで冴れた長髯の中から名工の塑像のやうに浮出してゐ

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

419

た。

「僕も此際何とか決心しなくちゃならないと。有衆に交って、人間が人間を審いてゐる恐ろしい世界の探捜に行つて、此の長い髯を切取らずに来るのも僕には取つては宜い事だつたかも知れない。」

高木は軽く頷を振つた。時々は身体を捩寄せて、高木の肩へ浪のやうな振掛つてゐる黒髯の端を指先で弄り乍ら、

「私、大阪で初めてお目にかゝつた時から

原稿用紙(二〇)(新潮社下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

420

……私、あのネエ……と夜日たも若き軟柔
な婀態を作り、ねネエ、言わさん、言っても宝
い？　怒らない？　言はして頂戴よ、ネエ、
宝ですか……私、あのゲエテの像が如き
で能く読みましたが、プリエール街の酒屋
に居た少年ゲエテ……巴奈に如何にか
いつた時、あの少年ゲエテを境おしましたの
よ。だけども不可いわネエ、私にはカタリナ
の容貌が無いんだもの……と居耐もやうな
素振をした。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

二行つき

「俺には外套エテのやうな華やかなロマンチックな情趣を有つ事は出来ません。」と捨鉢な荒々しい調子で、一切が幻滅だと言ひ放つ。

高木は起上りざま、着んだ服の塵を払ひながら、後へ伸びをして陰気な、凛とした声で、

「時子さん、地橋師へでも登つて見ませう！」と言つた。

早稲二〇（鉛柔版下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

二人が橋跡へ登つて行（やくらあと）
間から登つた片割月が、王子滝の松ケ枝（岩）
ら町を覗くやうに製材所の亜鉛屋根を白く照
して居た。

「好い景色ネエ。」

「自然に敵ふものなしか（かな）

術なんか駄目です。」

「高木さん、あなた大変器用（かた）

るわネエ。」

「昇吉もしますサ、僧は今瀬戸際に立つて（せと）

標準二〇（鈴乗版下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60　ガラス使用

るんですもの……」と云つて高木はたも感慨に堪えないやうに、「時子さん、あの絶望を見ながら僕の身の上話を聞いて下さいませんか。」

「何ですの。」時子は両の袂を膝の上に斜せた。

「一体僕が藝術に携つたといふのは全く宗教的動機からです。学校を卒業してから暫くは牧師をしてゐましたけれど、牧師ではイクら教壇で声を嗄らして教会へ来る少数信

者しか教化する事は出来ない。これでは駄目だ、どうしても此の全体人を全体に訴へて現想を吹込まうとするたは話壇の説教ありは藝術で、殊に日本人全体の頭を改革しようとするんは歴史や因襲の偏見の取り切れない学校では到底駄目だ。と斯う思つて僕は断然牧師を廃めたのです。而して愈芸術は実に意気冲天の勢で今にも日本全体を僕の藝術で風化するやうな空想に燃えてゐましたが、扨て愈々着手して見ると矢張り駄目でした。銀座や鹿鳴館

425

という若輩者の書生があるとせう、（先刻なのいはかうしの）男が伊場高志という男が居て、（警醒一発）というのを作つて、（去る七月）駅逢を相手にクリスマス雪間の餘興芝居を誓（も）古して居たのだが（甚だとうくちわが）来舞臺へ（しゃしゃり）出て、ファストを公演するやうになつたのです。で、僕もたいに（大れに）刺撃されて、丁度新劇協会の機運（しんげききょうかいきうん）集して旅上分をしてみたのですが、マがく（なにはともあれやしたいと）回来人の芸術的理解は浪花節程度で、（かり）夫れ以上の芸術は殆んど顧みられないです。夫れ

（株）三〇（酵素茨下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

926

から僕一人は最(もっと)も先(さき)に創(きず)であつても一座のものが皆(みん)な僕と同じ心持ち成つて呉れないと、最初の視(かんしょう)は皆な真創が何時(いつ)の間(ま)にか忽ち藝人根性に成(しな)つて了ふ。「素人に(しろうと)!」といふ(モットオ)格言で、素人といふ事を忘れちや(しつこ)ならないと執拗く戒めて置いても少し舞(すこ)ると直ぐ(くろうと)素人になる、自分の技藝(ぎげい)も未熟(みじゅく)なに(しつぱい)も失敗しましたが、夫(それ)以上藝人根性(げいにんこんじょう)といふ眼に見えない困魂(いんじん)の気分が根強く附纏(つきまと)つて、新しい藝術を破壊(はかい)するのには苦(さい)を投、

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

427

げました。今まで旅興行で即(すぐ)離を食ったり、女優と男優との間(あいだ)に混雑(こんがら)が起って事件新聞の三面で悪口されたり、学校時代の友達からも殆(ほとん)ど絶交(ぜっこう)同様(どうよう)にされたり、元結屋(もとゆいや)が訴訟(そしょう)取扱の刑事被告人(ひこくにん)！」と高木(たかぎ)は始終(しじゅう)言葉を途切(とぎ)らして吻(ため)息を吐(つ)いた。

「こんかし全く失敗(しくじ)やアありませんの。マダ〳〵前途(ぜんと)がありますワ。」

「さ、どうかネ。金森(かなもり)さんでも押川(おしかわ)さんでも捲井(まきい)さんでも、成程(なるほど)世間(せけん)からは稍々(やや)の風評(うわさ)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

をされてゐます。しかし皆な(みん)は善(よ)かつたのです。金森さんが同志社の校長時代に米國宣教師と衝突(しょうとつ)して「なァに日本人は日本人の手ん間(よ)つて仕遂する！」と言つて佐道界を怒(おこ)して去(い)つ金を作(こさ)つて東北学院の院長を辞して、独力で立派な学校を起(おこ)して見ようと思つて事業に手を出(だ)したが経営(けいえい)の中に石ころを投(な)げられたと悪口(わるくち)せられて来(き)たのだなんだつて二

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

429

兎や三兎の信者に説教するより、説法されなって大いに國家の為を盡さるゝ方が、余っ程心ある事ではないか。

今一歩先のが抓もの失敗なのだ。もっと隠忍して居れば善かったのだ。畢竟時機が早かったのだ。内村さんなんかは忍び通した連中だ。あんで牧師とか校長とかの椅子へ喰りついてゐるんで無くって、恍ゆる様な活氣を有って皆なから尊敬と日本國を脱んでゐたんだ。

かうネ。金森さんでも揃ひも揃ふんでも少々早まって牧師を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

廃した咽は本當に日本を去んでか、つれもの
です。所が実際北海に乗あして見ると下車が
きっぱん生一本では押通せない。
時子は縫り面白くもなか、上話に空耳を貸してゐた
くなつと見え、
「止しませう其様な話、私、大嫌よ
りもつと〳〵大事のお話があるのよ、」
「大事のお話？何ですか。」

(第三〇号)(鈴柔友下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

631

のえんなに固くお感になら
ないでも宜い。」時子は拗ねた身体を揺ぶって袖を
捉へ押當てた。
「時子さん、然うぢゃ僕にも女優との関
可成り親しい者なんです。」と姿勢に折り
「高木は何を思ったか右の腕を前に突出して
夫れを左の手で扱き乍ら起上つた。
「高木さん、あなた、未だに女にてもの
何う思つてらつしやるの？」

（綿業坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「姪弟者ですから女を論ずる資格はありません。イヤ、女はかりでは無い。一切が幻滅です。最う嘗も藝術を断念して、修道院つて一生を無言で暮さう？」

「ええ、夫れは本當の、」時子が答いやうに甚の袖に縋つた時、丁度月は黒雲に蔽されて二人は暗黒に包まれて了つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

433

宿命

十　　渋柿

十一　　柿　　十五コ

十二　　柿　　二十一枚

自転車ニ十枚

清井

国立国会図書館　　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

試錬

「名古屋！　名古屋！」と
驚くり眼を覚した時子は棚から
荷物を引ずり下ろし、ソレ、クサと橋
を出ようとした時、最前から差向いに
子を見てゐた紳士がツカ〳〵と来て、
「松本さん！」と声をかけた。
「ヤア！　鷹井さん！　先ア暫くでしたねえ
とシゲシゲ鷹井の顔を見つめつゝ
「。」

古屋に在らっしゃるってネ。」

「ええ、疾うから来てゐます。」と庵井は微び笑しながら、「今、大伴君と一緒に来て居ります。」

知でせう。彼の大伴君が剛毅一徹な今日子さんを手なづけたのは。」

今の汽車で帰つた所です。」

「先ア、大伴さんが？」時子は残惜しさうな顔をした。

「貴女は何方へ？」

「私？　私、東京へ行つて来ようと思つて……」と一寸言葉を断つて、「あなたが此方へ？」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

の教室に在らっしゃると聞きましたので、急に御伺いしたくなりましてね。

「然う、有難うございました。僕も一度伺(あなた)女に

「然う？」と時子は事も無げに言ったが、

「別に詳しい事は聞きませんでしたが、新(しん)

「嘘？　どんな事を言ってらっしゃいまして？

「大伴君とあなたの御噂をしましたのです。今日

「目に掛(かか)りたいと思ってね。

「嘘？」

左の？」

宮で一寸お目に掛(かか)りたいとの御伝言でした。

（明二〇・（鈴楽坂下山田屋）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

437

心では京都の宿屋の一件を話してみなければ
よ
善いかと思ったので少し探針を入れて見るつ
もりで「大伴さんは今何所に在らっしゃるで
せう？」「三本木の」
「京都の信楽とかいふ宿に……」
「マが信楽に……」と牛分口まで出かゝつ
たのを噛殺して、「萬井さん、どうかお宿へ
御案内願へませんでせうか。」
「然うですナ。」と萬井は一寸考つてみたが
、「御夕飯は？」
「マが有るんでせう。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「マアですよ。」

「ヲヤア、何所か其所ら辺へ濡して参りませ
う。」

「ええ、然うしませう。」と言つて時子は恥かしさうに俯向いた。

「持すませう。」と鷹井は時子の手から手荷物を奪ふやうにして歩き出した。時子は面上の途を泥を除ける為めか用心しながらするやうにして歩き出した。鷹井は時々振返つて時子の容子に眼を注いだ。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

「此家へ行きませう。」廣井は停留所の所からカフエめいた洋食店の二階を見上げるやうにして言つた。

「参りますう、何所へでも。」

二人は二階へ上つて行陽の卓子に長髯を伸した老紳士が席を新めた。

「五年振ですナ。」廣井は椅子を前の方に廻して

「本當に不、暫くでしたワ。」時子は言ひ乍ら宅中を一通り見廻して其所に誰も他の客が

居ないのと安心したらしく、私、お眼には掛らないでも能く貴女の事は覚えて居ます。忘れられませんワネ、母校時代の事は……」

甚中注文の皿が来たので二人は無言でフォークとナイフを取った。

「殊に僧には貴女を忘れられない理由が有ったもの」

つもあります」と鷹井は「貴女には何の意味もオークを休ませ乍ら、

奥かつたのでせうが、貴女がウチんとこの女学校を卒業なさる前に諸妻晃を某を棒に下すつ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

大事がある。」

「ええ、覚えてみますわ。」時子は優しい眼で廣井を見た。

「其の潜画紙の中に、「ろくでなしの子守唄」という字を綴り込んだレースの栞が挿んであります。」

「今お其の栞を大切にしてお持ちですか。」

言いつゝ廣井は窓と時子とを見た。しかし時子は急にかうりと態度を變へて何にも言はなかつた。廣井はこうりたい事が澤山ありさうにモグ〳〵してゐたが時子が餘り白々しいので

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

4992

一行アキ

寄付く島もなく黙つて了つた。そして言葉少の極めて粗末な食事を終つた時、時子はサツサと勘定を済して、
「さア、鷲井さん、御案内を願ひませう」。

支那風旅館の裏二階へ二人が通つたのは時過ぎであつた。女中が二人を夫婦扱ひにして、鷲井に上座の蒲団を薦めた跡、鷲井は極りの悪い顔をして床の間の軸を眺めたり長押の額面を見たりしてゐたが、時子は

拳銃二〇（新柴茨下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

平氣な顏をして下手の欄圍に坐りつゝお座なさいナ。」と言つた。甚のない懷しみのある声であつた。

「はア、」と鷹井はモヂ〳〵して立つてみたが、「償はお暇致しませう。」

「どう〳〵して？、」と時子は指環の光つてる白い美しい指を大鉢に翳しながら、「五年振りやアありませんか、種々お話がありますわ。」

時子は少しく顏を傾けながら鷹井を見上げて「お座りなさい！、」という言葉迄上に滲い

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

強い一種の暗示を投げた。時子の姉ゆるやかな、しかも力のある眼の働きは苦も無く廣井を火鉢の前に坐らせた。

「夢のやうですナ。」と廣井は少し顫へながら言つた。

「本當に私、不思議な縁ですワ。師匠れして以来、私も種々の経験を積しました。」

「廣島で即不幸のあつた時も、お手みこそ申上げなかつたが、影ながら同情してゐました。」

(半紙二〇)(新栄紙下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「有難うございます、しかし私、夫と別れた事なんか何とも思つてゐません（れいせん）わ。」と時子は冷然（れいぜん）と一た面地（おもてじ）で、「夫（を）とりやア月並（つきなみ）には女の不幸（ふこう）でせうけれど、結婚（けっこん）生活（ライフ）てものは寧（むし）ろ不幸か考へものですわ。奥さんなぞ、」

「奥さんなぞ、廣井（ひろゐ）さん、貴方（あなた）」

「ハヤエラア？　結婚（けっこん）なんかなさらない方が宜（よ）いわ。」

「マア檜舞台（ベテラン）です。」

「結構（けっこう）ですわ。寧（むし）ろ一生（いっしょう）独身（どくしん）で居（を）さん。」

「ネエ廣井（ひろゐ）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

944

廣井はマジマジこて時子の顔を見ながら黙然
つてゐる所へ、女中がお湯にお入りなさい
まし。と言つてまた。
日曜、一風呂浴びてらっしやいまし、随分
今お疲れでせう？と
時子は女中の手前、二人を
あのやうに見せかけたばかりか、長い旅路を一緒に疲れて帰つたやうに取繕つたので
あつた。廣井には甚の心情が歴々と見え透いてゐた。しかし心の底には夫れを軽蔑するや

（鈴柴友下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

うな感じと、何かが嬉しいやうな感じとが等しく差んで、ぼうーいと紅の火照つて来るのを覚えた。

「御僧は止します、貴女、泊つてらつしやい」と言つて了つた時、鷹井は自分の言葉と態度とが餘りに馴々しかつた事を愧かしく思つた。

「勿然う、では私、一寸泊つて来ますわ。」と時子は次の室へ行つたが、暫くなく服を開けて衝立の陰で静に脱ぐ音が聞えた。鷹井は理由なく向いた。そして廊下を沿く遠音を聞き

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

484

凝と耳を澄して聞いてゐると、雲のやうな白い素足が鏡のやうに拭込んだ板の上を小刻みに辷つて行くのがアリ〳〵と眼に見えた。

時子が階段を降りて廊下を曲つて化粧部屋の戸を引明けたのも、甚所で看物を脱いだのも、湯氣の立籠めた生温い浴室の中へ入つて行つて、大理石像のやうな真白い身体が足元に氣を付け乍ら煙すしやかに少し小腰を屈めて浴槽の縁も、浴槽の中に

すいすりと首つきり浸つて襟足を漂さぬ用心

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

しつゝ頸を胸の所に付けて白い両の腕を前方に伸した様も、右足をキヤヽと折つて左の膝を立てゝ首筋を洗つてゐる様も、皆なアリアリと透視する事が出来た。

布片の褌を左の膝頭に乗せる弥助にし共足を組交した儘で両の鏡前にすッきりと立つて髪を掻上げつゝ温泉の精のやうな美しい姿が現れた時、鷹井は熱火の鞭で殴られたやうに全身が燃えた。

思はず走り寄つて、そして自分でも自分を疑ふやうにキヨトヽヽと四辺を見廻したが、褌の傍に最前女中が揃いて行つた浴衣が、ちやんと

（静栄坂下山田館）

一行アキ

950

神輿みこしを見付けた時、矢庭に夫れを擔ぎ上げて二歩三歩障子の方へ駈け出さうとしたが、ハッと氣付いて浴衣を元の所に投げた。

庭井が思ひ遣しやうに火鉢の前に膝を坐つて吻と溜息を吐いた時、トン〳〵と階子段を上つて來る僧しい、跫音が聞えた。庭井は思はず端然と坐り直して兩手を膝の上に突い

た。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

457

時子は大島に伊達巻の艶いた湯上り姿に金紗縮緬の羽織を引掛け、ホカ〳〵した煙草を摯りながらべたりと坐つて、

「好いお湯だつた事！」

小首を傾げて鷹井を流眄に見た。鷹井は渋

と夢の国から現実の女界に帰つたやうに、

「豊女の湯上り姿を拝見するのは大濱辺来

ですが、」と顫へ声で言つた。

「えゝ、然うでしたネエ、私、あの時の事を能く覚えてゐますワ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

457

時子は湯上りの透通るやうな美しい体格に微笑を浮べつゝ机の上に拡げた棒切で英語をお書きなすつたわね。さう……My heart is at your heart. ていふんでしたわ。オヽいゝッ。」

「貴女は可笑しかつたでせう」と僕は認めしさうな顔をして、「しかし紳の文句を覚えて居て下すつた事を感謝します。」

「私に能く体得して見ましたよ。」と言つて時子は火鉢の前に坐り直して、「貴方

457

は私を覚してゐて下すつたんだ。

鷲井は眼を円くして時子の顔を見詰めた。

時子は鷲井が要求するなら何時でも唇を与へようといふやうな態度を見せた。若し二人の間に犬鉄が無かつたなら時子は其の艶かしい姿を鷲井の胸に投げ掛けたかも知れなかつた。

婬蕩な女

日私だつて貴方のお心持が嬉しかつたわ。

私、あの日本式英語を時子は真鍮の細い火箸で白い灰の中に

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

459

樂書をし初めた。傍と氣付いた蔦井は其の時子の手の動き方から、時子の心の中に動いてゐる事物を讀見しようと最も一意とを次つて火箸の先を見詰めた。

All of my heart is under your power……と最初の程は書いて居たが、次には少しく靜かな手付きで、your have the absolute power on my heart and mind. と書いた。二人の間には火箸が灰の中を走る微かな音の外何物も無かつた。しかし蔦井の心は躍つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

455

時子は何気なく火箸を深く灰の中に突さしてゐた。

と、Your are the king of my heart. と書いて夫れを凝然と見詰めてゐた。

唐井は武者振りをすやうに少しく詰寄って、

「今になって異腹を言ふのやありません、貴女が極口さんと御結婚なすった時は、僕は最う一切の望みが矢はれて生きてる空はありませんかった。」と言って火鉢の縁に手をのけた。此時唐井の心には此の艶かしい時子

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

ユーアールサイング オヴ マイ ハアト

が口あなたは私の心のま王様ネ山と言って縋り付いて来るからうとうとやうな豫想があったの。しかし時子は案外平然として、灰皿の上に悪向い指を滑らせて、夫れを軽く弄かすやうたしながら、

口先ア、好い加減になさいよ。本當にあなたが夫程思つて居て下すつた事なら、何故プロポーズなさらなかつたの？今になつて其様な事を仰しやつて……」と言つたが、急に娘々した羞恥を見せて俯向いて了つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

4547

「一ヶ月十一円の給料で、どんな事が出来ますか。」

「貴女を受けてる、貴女方の語はゆる禮義神なる神学生である僕が、文治な身分であるお嬢さんの貴女に、如何に冒瀆でもプロポーズが出来ますか。拙い英語をみた書いたのが精一杯でした物。夫れを貴女は、……」

「だって篤井さん。」と時子は躊躇って、「男てものは忘れっぽいから、斯んな事を仰しやったって、直ぐ私を忘れてお了いなすったでせう？」

「（二〇頁に続く）（著者名下田歌子）」

458

「忘れなくては罪悪ですから、強(むり)て忘れて了(しま)ひました。」

「だから、私、男の方(かた)を信じないのよ。男てものは愛(あい)してゐる間(あひだ)も、ずんずんと忘れて了(しま)ひます。女は一度(ど)愛しられた人は何年経(たつ)ても忘れやしないわ。私は楢(ひぐち)と結婚(けっこん)しましたが。けれども夫(それ)は楢口(ひぐち)の私に対する愛情(あいじょう)の発表(はっぴょう)が普請(あなた)より独逸(もうれつ)だったからで、貴(あ)なた方は外へ字を書いたばかりぢやありませんか。あの時若(も)し普請(あなた)がプロポーズしたなら私な

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

豊市と結婚しても私は
違は口では御禁神だなんて悪口
ても、矢張り牧師は絶対の職業の中で一番尊
い神聖な職務だと心から信じて居れるんですも
のー！ですから五年前に大海で私に投げて
下すつた豊市の愛情は今でも私の胸に収つて
あります。斯うして五年振でお国に掛つたの
は、五年来私の胸に秘めて居た豊市の愛
情を取出す時節が来たのですワネ。
四えッ、と鷹井は呆れた顔をして眠と時子

（東京下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

一行アキ

960

を凝視めたが、脇て眼を一杯に睜つて、

同妻女は猫の時、腹の立つ程冷たかつた。

あの富が浪に打たれて消えて行くのを見た時、僕は僕の心も猫の富と同様、誰にも識まれ

おに永遠に消えてるのだと思つてましたが、五年振の今日、初めて妻女のお心持が解つて、最う何にも言ひますまい。唯感謝します。時は魁つて自

「心と富井は憚そ乍ら言つた。

今の膝を見詰めたまゝ、暫くしてみた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

「最う何時でせう？」と廣井は時計を出して見て、「おや、十一時だ。では失禮します」

「どうして？」と時子は次第に調子づいて、

「十一時だつて十二時だつて宜いぢやないの。こんなに遅くなつては、」と廣井はモジ〳〵して、

「こつそり深夜まで同座してはいけません」

「何故？　私は貴方を尊敬してゐます。貴方も私を認めて下さる。おゐに清い心を認

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

462
別行

めた者同士なら、深夜から何時だろうが、対座でもよろと如何しようと憚る事は些もありません。」と時子は眉を顰めて、唇を噛みしめる。

「あなたは弱虫ね。」と時子は立ち上がりながら笑った。

「仰しゃる通り僕は弱いです。」と眉井は俯向いてしまった。

「あなたは眉井の死を見ら

原稿二〇（鈴来茂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

467

ます。清い心と仰しやられると恥入ります。
かう仰して深夜曼女と相対でゐます、
まゐ、魔に魅入られて恐ろしい心持になるかも知れ
ませんから。」
「私だつて恐ろよ、一人は取られ一人は残
さるつて言ふ事がありませう。これから朝まで
の間には五の心の中には大変な戦が始まり
ませう。餓鬼、疫病、地震、そんな肉体的な
苦痛なんぞに比べられない魂の恐ろしい苦痛
が襲つて来ませう。廣井さん、若しおゐの心

拳銃二〇（鉄条放下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

に清い愛情が無くって即覧、私達は取返しの付かない恐ろしい陰疫の病に落ち、苦しい悩のやうな肉の痛みばかりに生きて行く様れな者となるかも知れません。左もなければ貴方が私を淫奔者と罵るか、私が貴方を陰疫者と蔑むか、お互に聖人振つて悪口の言合いつこをする位が最終ですワ。ネエ鹿井さん、恐ろしい悪魔が日を晦くし、月の光を隠し、星を鎖ざして私共を害す苦しくも疫の患難と思ふさまざまに戦つて、そして苦

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

668

しい苦しい思(くるし)と思(おも)ふ子(こ)存分(ぞんぶん)寝(ね)て見(み)ませう、
ネ、蔦井(つたゐ)さん。そして東(ひがし)から出(で)て西(にし)へ閃(ひらめ)く電(いなづま)
光(ひかり)の光(ひかり)には五(いつ)の色(いろ)の違(ちが)いく心(こころ)を
てみよう分(わか)やありませんか。
の権威(けんい)が神(かみ)の姿(すがた)と成(なつ)て現(あら)はれて来(く)
るのでせう？
ネ、蔦井(つたゐ)さん、私(わたし)共(ども)の心(こころ)には
、朝(あさ)まで徹(とほ)して相撲(すまふ)に
もう分(わか)やありませんか。
に鍛(きた)へ込(こ)んで了(しま)つていやう
な、幼(をさな)に成(なつ)ゆる言(こと)
葉(ば)を吐(は)きつゝ、蔦井(つたゐ)の膝(ひざ)を揺(ゆす)
揺(ゆす)つた。

（筆記二〇（鈴乗筑下山田誌）

試錬(しれん)に遭(あ)つて現(あら)はれ
時(とき)ほど伝(つた)へ熱(ねつ)火(び)の中(なか)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

御免下さいまし、と外の声を掛けつゝ、二人の女中が襖を開いて手をつき切お床を延のべませう、と云つた。

時子は黙つて座を移した。廊下なかつた。

二人の客を怪訝な顔しながら、女中は無言で二つの寝床を列べて敷いて、御機嫌克う、と丁寧に頭をついて引退つて了つた。

女中達が下つ降りて行つた時、勝利者のや

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

うに勝誇った時までは、「鷹井さん、何を考へ込んでらっしやるの？　最う参なの悪たのといふ事は神様にお祷けして、素直に天国の子供のやうになって、朝まで楽しくお喋しませう。ね、鷹井さん！」と言って、くの字なりに鷹井の顔を見上げて二ツと微笑んだ。

「妻女は強い！」と鷹井は吻と息を吐いて、「強りから妻女は子供にでも何にでも自由に成られるでせうが、僕には夫れ丈けの勇気が無い。けれども仕方が無い。女王の捕虜と

拳銃二〇（榊原坂下山田蔵）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

468

なつて尚く監禁されませうし
のようして捕虜なの監禁なのと仰しやるの
、私はそんな暴力を有つて居ないのを。私達は
廣井さん、誤解なすいちやいけません
お互いの肉体も情慾も悉く捨てて、無
の清い心と心とを一つにして、栄光の雲に乗
つて天の使達に聖い〳〵愛の歌を歌はせ乍ら
、主の牛の肉の香ん酔つた人達を呼覚してや
らうかやありませんか。迚も清い美しい心
持たなるのかやないのを、え、廣井さん、迚

学燈二〇（一）静栄教下山田館

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

469

うちやア無くつて？」

時あの私と我が言葉ん感激の涙と感極まつた。

そして屏に面神と眼に庵てあなたの仰しやる事は僕ん解らなくなつた。」と唐井は再び沈黙した。

「だつて唐井さん、あなたは宇教家ちやアありませんか、宇宙の摂理ですの、清い心と心との接触ですの、愛と愛とが結び付て来た時ですもの。神と人との霊と霊とが結び付て来た時、あなたの宇宙心と小宇宙心との実現ですもの。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

が、ピッタリ接吻(せっぷん)して時、そこに宗教とのつくものがあるのでせう。私、さう思ひます。

ワーッー愛(うへ)なつて矢張(やはり)さうでせう？、情い心が注いい心に觸(ふ)れた時其所(そこ)に本當(ほんたう)の愛がある

のでせう？人間(にんげん)の情緒(こころ)の一番(ばん)清(きよ)いものが、神(かみ)に觸(ふ)れた時宗教というのであり、夫(それ)が人に觸(ふ)れた時

其(その)が愛(とうとい)でせう。ネ、廣井(ひろゐ)さん、私(わたし)は愛と宗

教とを取(と)り違(ちが)へてゐるのですか？間違(まちが)つてゐ

ますか？

時(とき)には晴(はれ)れ晴(はれ)れしく感(かん)激(げき)して膝(ひざ)を進(すす)めた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

二行アキ

「矢張しっかりします。」と儀井は細かに起上うた。

「お歸んなさるの？　朝までお話下さるお積りかやア厭かつたの？」

「なかなか疲子さん。」と儀井は腰を屈めるやうにして、「僕にも少し考へさして下さい。僕は實に弱い〳〵肉の子供だとら子事を沁々悟りました。」

「私だつて弱いのよ。」

平成二〇（財）柴友下山田製

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

「イヤ、時子さん、貴女は是まで幾度も
うな情火と戦つた印経験が沢山ありませう。
けれども僕には其の経験が無い。だから僕は
今夜貴女を女王と崇めて、貴女の脚下に蹲ま
る捕虜の心持にならなければ……僕は、僕は
……」と詹井は戦くやうに、「貴女に射し
て情火の擲弾を投ずる恐れがあります。危険
です危険です、解放して下さい。僕を解放し
て下さい。」

「奉仕よ、詹井さん。」と時子は扉を引止

原稿二〇（罫紙袋下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

むるやうにして、の捕虜(ほりょ)からの解放(かいほう)たのと仰(おっ)しやらずに私の王者(おうじゃ)とおなりなさい。と。

の王者になれる位なら、横着(おうちゃく)は決(けっ)して悶(もだ)えません。

んの僕には其の資格(しかく)が無い。お前のしもべが僕は、超人(ちょうじん)では無い。恐(おそ)れ多(おお)くも、ですから弱い一男です。で、深夜(しんや)、貴女(あなた)とイツまでも同坐(どうざ)して、時貴女(あなた)のお心に対して反逆(はんぎゃく)を謀(はか)るかも知れません。清い一万々一其の反逆(はんぎゃく)が穂(ほ)に現(あら)はれたなら、貴女(あなた)の其の強いお心は、影(かげ)も形(かたち)も残

僕を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

らないまでに私微塵に佛砕しておろひな
さるのが殘想出来ます。敗北に決つた戦ひを
敢てする愚策は取りません。
お暇致します。
ゆ不可ません。夫れかけ自覚してゐらつ
しやるならお逃げなさる事は無いワ。甚のお
心持でさへゐらつしやるなら、お互に清い交
の空氣に溺うた美しい一夜を神聖に過す事が
出来ますワ、……あゝ嬉しい、私は今まで、
どんなにかこの時を待つてゐたでせう？、最も

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

4.75

一行アキ

う世界はもう二人ッ限りの世界よ。純潔な香の焔が、其の焔が益紅の焔が今私の心に燃えつゞきます……私は此の胸が轢轢する程……と思う程……と思う程……私は最う死んでも宜い……

時子は半身を起して鷹井の脱に縋つた。その儘暫らくの間自分の面貌を隠して居たが、やがて顔を上げた時には、眼に一杯の涙を湛えて居た。

今の様なくつたりと疲し込んだ時子を見るのは鷹井は初めてゞあつた。鷹井は驚いた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

276

四時子さん！」と周章て、時子の手を振解いた鷹井は、四肢頑丈で、僕の弱い心は最も暴虐の権を逞しくして来ました。言うも恥かしい芳情か今私の全身に絡え纏って離れやうにも離れません。と言って其所に投げつけられやうに坐ったか、眼を閉じて一心に黙禱し初めた。

二分、三分、五分、十分経っても黙禱は続いた。小いく妖魔の姿は矢のやうに鷹井の周囲を取巻いて廻った。深いく地丈の中から呼ぶやうな声が始のやうに身辺に渦巻きながら

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

另

477

ら周えて来た。白い手が招いた。美しい乳房が見えた。漆のやうな黒い髪がミルクのやうに白い膚の上を舐つた。水晶のやうな瞳が深かつた。そして麓井の全身が鏤刻けて恰好よりさうに思はれた。しかし驚いて、麓井の前には唖麓いくつもの瞳の野が見えた。赭黒い石が其所此所に転がつてゐるばかりで、草も花も何にも無かつた。しかし砂の上に小い人の足跡が一つ見えた。眠と見てゐると失れが段々大きくなつた。足跡は汐の

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

778

上に一尺程の距離を置いて縦にクリキリと刻んやつた印せられてみた。その痕まで明瞭見えた。右とたとの親指は一寸ムのやうに砂濱の上に一尺程の距離を置いて縦にクリキリと刻んやつた印せられてみた。その痕まで明瞭見えた。右とたとの親指は一寸ムのやうに砂濱

は直井の眼の前を果なく過ぎ去つた。そして最後に大きな岩が現はれた。岩の上には若いナガレ人が横に臥てみた。美しい若い女が、ナガレ人の眠を覚さまいやうにと思ひ足音を窃と岩に近寄るつく爪先で歩いてみた。手にはナイフの香油を持つてみた。それはナガレの人の髪に注がうとする為であると知れた。し

中級二〇（第参次下山田版）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

白い美しい腕の
中から溢れ出て来る
細い指先から
糸のやうに美しい

かし女の近寄らない前に
て半身を起した。長い髪
た
垂れてゐた。女は嬉しさ
黙つて黙礼した。すす
が女は手を高く差上げて
小腕から迸つた油は
が流れ出るやうに見えた。
人の頭に落ちた時、ナがし人は
微笑を湛へた顔を仰向けた
足と喜悦に目の如く
た。女の顔は其時
ゐた。恍ゆるやう

かし人は眼を覚し
髪が肩の所まで
た。ナがし人は
ると笑つた。
ような時踏すやうであつた
敬を倒しました。
芳烈な香を放つ香油
最後の一滴がナがし
極めて少しく
満

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

な眼でナガし人を見下してゐたが、女の顔は段々ナガし人の顔に近づいて行つた。そして其の唇と唇とが僅かに触れようとした時、女は驚いたやうに身を退けて、青年の足許に打ち倒れた。

女の眼から真は涙が雨のやうに降注いだ。女はナガし人の足の上に突つ伏し自分の涙を里い丈なす髪で拭いては拭き、拭いては拭きました。ナガし人は埒もおやうに女を眺めたら、しかも女の為すが儘に委せてゐた。何所か

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

另

一行アキ

らか聖い音楽が聞えてまた。遠か雲の彼方で
美しい合唱が全に響く。聖はしい音を満喜する
やーに思はれた。聖い

一行アキ

時子は黙祷してゐる僧井の顔を眠と見てゐ
た。か、五分、十分と経つ。
な敬度な気色が面に現はれ
ん
くなに地震が揺らうと鳴神が
体が熱え殺れ、地震が裂け
とも動じない聖者のやうに見えて来た。時子

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

492

子は是ですで是程真剣な真面目な人の態度を見た事が無かつたので、思はず感に打たれ涙を流して了つた。

……此の柴は水無き井戸なり、狂風久しく絶えず、雲なり、黒き闇かなり。形は猶ほ誇りたる奢しき言葉を語り肉慾と淫乱をいとて、猶の迷へる者を誘へばなり……

時々は心の中で此の聖句を繰り返して読んだ。而して二十分も経つたと思ふ頃

(原稿用紙 二〇〇字詰十三行)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

另

宿井は静かに眼を開いて、四辺を呼びかけた。

「はい」と時子は極めて素直に答えた。

「時子さん、赦して下さい、僕は今の今まで妻女を欺いてゐました。五年前に妻女に心の一部を捧げたと言ひましたが、実は妻女に三人五人の婦人にばかりでや無い。甚頃僕は三人五人の婦人に愛情らしいものを捧げては終なか矢張してゐたのです。僕は実に軽薄でした。実に済ひでした。妻女に悪い、今晩、私は本当に

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

朧気な心で妻帯を對して妻女を偸視してみました。すると彼が流室へ行かれた時、襖は閉めてあったのです。私は好奇心の申で強ましい慾情の撲動を抑へ兼ねやしたら、それを妻女に隠してみました。僅には清い清い音の油と十ルトの香油を頭に注かける溢抗いも無いものです。而も弟も無い、と云ふ井は心から慚愧に堪へないやうに凝乎と考へこんな。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

另

宿命

四五が、時子さん、と軟や動く時子の傾向
いた前髪を見詰めて、自分の発育を棚に上
げて他人を拷問するのは失礼な話だが、時子さ
ん、貴女も情い者の処女の心なのと失刻か
ら、夫れが心の隅々を
すいも見終ふ神の前に未熟な疾しく無く仰し
やうれますか。自分の卑しい心から貴女を疑
ふのは、益々自分の発育を現すやうなもので
がいゝ早い訣が今日貴女は借と出会はなかつ
たなら、あなたの心の何所にも、借とゝふ負

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

另

Y 896

宿命は……

多牧師の影も end 見かつたのであ
りませんか、僕は今日偶然お目に掛つた時、
今まで全く忘れてゐた十五年前の淡な憂と、
恰も無心の昔のやうに誇張して貴女に訴つた
の時、自分で空想を逞つて自分の肉情を満足
させてゐたのです。実に果敢ない夢でした。
ましたね。時子さん、あなたも未だ嘗た神の前に
……神の前に……
僧井の面には一句毎に熱誠が現はれてゐた
。時子の俯向いた眼から露が落ち
ポタリと露が落ち

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

另

一行アキ

鷹井は再び眼を閉ぢて黙禱した。時子は屋井の言葉がヒシヒシと身を責めるやうに感じた。

「鷹井さん、能く仰しやつて下すつたわ。」と時子は俯向いた顔を上げ、「貴方の事なんか忘れてゐました。けれども鷹井さん、おかげで借りの無い心の境涯を満足させる事が出来ると思つてるのは間違ひも何でも無いの

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

489

です、私、本当は彼の愛に
愛に溺れてみるのです。
四人目に若し夫れが出来るなら、全数も返
偶像を投捨てゝ了はゞ最の
出来ますまい。
いたゞいて私は此の幅れにも
と時よは遣瑕無さうに、四
たう、私は死んで了ります。
四再婚なさい!!
と彼井は宣告するやうに

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

言って、の信仰(しん)生(い)まれて、異性(いせい)の着(き)た振(ふり)越(こ)す
る独身生活(どくしんせいかつ)加減(かげん)遣(すく)なければやうな
さい。清い参詣(さんけい)の処女(しょじょ)の心(こころ)
には、芋(いも)の白く塗(ぬ)つた墓(はか)が
い、世間(せけん)の宜い物笑(ものわら)いになりま
の物笑(ものわら)いの、ま、笑はれて
間の人なんて……。
の そんな事を言つて居(を)るうちに、あなたは
取返(とりかへ)しの付かない堕落(だらく)の淵(ふち)に陥ちて、檻(おり)のや
うな部屋(へや)にさつも、一(ひと)の浮(うき)寄女！」と足蹴(あしげ)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別

490

にせらーやうな悲惨な羽目に痛込んで了ひます。夫れか僕の目には見え透いてゐます。女子には丁ね老女のやうな態度で、男の感情を玩弄にし、自分の感情を勘定に入れて、病犬の腸を肥すあのか弥らしく無い。老女を其の一人が断言するのでは無いか、老女の今の態度を更めないなら妨うも迷命が老女を待つてゐないとも限らない。時子さん、跪く沈着いて、ソロ静に御自身の意の処を御覧なさい。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

499

五年振で逢つた妻女、こんな苦言を呈するのは、妻女を呵責するのでは無い。償ひからか心に塊かある所からです。」

鷹井の言葉は一句々々謙虚が籠つてゐた。

室内の空気は全く森厳に閉ざされてしまつた。

「能く解りました。」と時子は暫く眠と考へ込んでゐたが、「私は全く浮いてゐました。」

と両手で顔を覆うて、

「鷹井さん、私の居た、私の須流の居た、お禱り下さい。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

492

唐井は默禱した。時子も一緒に默禱した。

二人は眼を開いて互に顔を見合した。

四方に救はれました。僧は始めて戰勝の嬉しさを知りました。私の前途には明瞭と光輝ある行手が見えて来ました。墓地に安置します。左様なら時子さん、さようなら。

巧く行かうが行かまいが、これきり、唐井は外套と帽子とを抱えて立ち上つた。

「唐井さん！」と時子は追縋つて、「あの私、未だ今まで男の方を軽蔑つてゐました。私

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別 6

699

の優しい一言で信仰が動揺いたり、道徳をはらうとしたり、左も無ければ同情して呉れる訳も無い。

況う長剣さか足りなかつたり、冷たい顔して嘲笑したり、憂すると憎むれも容な表面ばかりで、私の心実のつた。唐つて下さる方には又舎ろまでも井さん、貴方ばかりよ……私、何と云つて感謝して宜いやら……

ふなて共様な浅い心は微塵も有つてみないつもりでしたが、今は唯今、悉皆服が覚あ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別6

499

ます。」と。「菅井さん、……」と
菅井は無言で幾分も黙頭いた今晩を記念しま
ゆさう、時子さん、永久に。
せう。」と手を伸ばして強く時子と握手しなが
ら、「では、さようなら！」と
一言云ひ切ると同時に、サッサと障子を開け
き、後をも見ずに階段の方へサッサと歩いて
行つた。
時子は跳ぬはねやうに後へ退つてペタ
りと座蒲団の上へ倒れた。菅井の跫音は次第に

（原寸二三・〇㎝）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

消えて、帳場の送る声や表の人力の開く音ま
でが寂とした中に響いた。
帳場の時計が零れやうにボーンと一時を
打つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

梅

健次郎様、

お久し振りでございます。

御別れしてからまだ一度も御尋ねしなかつた私が不悪に思召しませうか、り申上げるは嘸氣狐れと思召しめ、あれから後の私の心の革命、飼畜の林に帰つてやうな境遇の變化は私を一番能く知つて下さる貴方に申し上げずにはみられません。

それから、お讀み苦くも御覧下さいませ。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

あの唄の私は空吹く嵐の呼ぶまゝに身を任
して野も山も所定めず吹暮れてゐました。
何といふ恥かしい事でせう。
校から校に木の間を遊び交ふ小鳥が、花かも花に歌ひくやうに、何處といふ目的も無く浮れ心に唄ひてゐました私は、
變らぬ囁きを繰返しつゝ、初戀の巣に止まる
事と今更ながら美しい事と思つてゐます
。そして母様な純な初心を葉はしく思
ひ出されて戀愛禮讃の笈摺の袖も切れた我身を悲

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

59

しまおんは居られません。
両別れして後、私は大阪から伊勢、名古屋から東京と、洋の方と堅うた果の
唯今は此の山里で静かに読書に耽つて居ますが流石に何処かに憐れな女の
幼い昔の事です。
堅爾様、
もう十五年になりますね。
殿の所で貴方が父さん、私が母さん、何にも知らずに椎の実を拾つて飯事をした時の

(東京下谷区)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

楽しさは今だに忘られません。あの頃の無邪気な美しさと較べて甚だ後の私の偽り多い醜さは何という悲惨でせう。

全く私は愚かでした。無垢な処女及者の恥知らずで肉の墳墓を通り越した醜い汚れた身を打忘れて何時までも清い処女心を有つて居るやうに思想してゐた私の愚かさ。

想へば想ふ程吾ながら此の浅果敢な私自身を軽蔑せずには居られません。

堅爾様、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別6

想ひ出の深い二日の旅路、其時は本當に其に無く楽しい旅路かと思ひました。私も其時は心に疚しい事が寔しも無いと思つて居ましたが、さて考へてみると、私は決して貴方に純なる愛を捧げては居ませんでした。不純な濁つた心を懐いて居ながら、よくもあんな平気な顔をしてゐられたものだと、あの夜の事を思ふ度に私は慚愧と悔恨に泣かずにはゐられません、私は石塚様に貴方ばかりではありません。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別
6

501

お鷹井様にも高木様にも悪戯の
手を挙げて其の辛らかな池の水のやうなお
心に小石を投げたのであります。私は何と
いふイタヅラ者でせう。イヤ人のお心を蛇の舌で
生殺しにし、白い〳〵絲のやうなお心を縺れ
に縺れさせて、獨りで喜んで居た私、能く
此の心臓が破裂して了はなかつたものです。此の心臓
配雨様、
私は妖婦でも毒婦でもありません。夫れだ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

502

のに怎うして斯うまで悲しい罪を造つたのでせう。私は私自身が憎くてく、起つても居ても堪へ切れない苦痛に襲けんます。

私は此の爪で自分の身体をバう掻き引掻つても尚ほ飽、頭の髪の毛を一筋一筋引抜つても尚ほ飽足りない気持がいたします。

でに自分を殺んでゐます。

堅爾様、

私の心の裏底には底光りのする道念が座をしめてゐます。私が懲に懲立て曇れ渇いて

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

暫地に駈け出さうとする時、いつも其の通
路が強く私の袖を控へて私の逸る心を制御
しました。私は其時此の厚い通信に潔く服従
しました。私は私の行為に苦みました
と渇きとを覚したい一杯に
すした。そして思ひ切り足を挙げて通ひを
蹴る事も得せず、とうとう服従も出来ず、
ふつゝい心に此え度ひる悪火浄火の戦ひの
他人に組つてスネて甘へて
した。夫れが度重なり悪癖となつたので

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

5-09

す。本當に私は間違つてゐました。私は二人の主人に事へてゐました。私は私のこの貧しくも忍ましくも忍ましい生活から遁れやうと思ひました。私は最う決心しました。私は最う誰にも戀しません。私は獨りで自分の胸を抱緊めて、私のこの黒い黒山の奥深い清く澄む戀の泉を獨りで淚ぐんで淋しく暮します。私の家深い虚偽の生活から遁れやうと思ひました。私は自分の家を土臺から石は壞

中巻二〇（営業部下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

505

して新しく建直さねばなりません。

堅雨様、

私は総う決心しました。それは強くなった意でも、強がる傍から意気地なく悲しさが矛々と籠上げて来て唯理由も無く涙ぐまれます。私は十五年前の昔に立返つて吾家が父さんお母さんと言つた甚頃の事を切めてもの憶ひ出にとする事だけは即ち夫れを死に切れない生通心の呻吟かと仕笑ひ下さらないやう

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

506

に願います。

奥山里に淋しく暮す有髪の尼、マダ血汐の枯果てない私、高巌嵐に吹れても落葉松は、ソヨ吹れても、私は去張り若い血汐を抱いて、自分と自分を戀して暮します。可愛いく髪放の時代を追憶して、自分と自分を撫で摩りながら暮しませう。さうした心の堅ちやん！と獨りで呼ぶ事を許して下さいまし。

先ず
駐爾様

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

一行アキ

507

それでは、作曲家と
こも老女と私とは坂令髪の
です。老女の窓の将来に幸
に祈つてゐます。けれども
不便な戀の敗残者がある事
ますやう……心から忘れ下さい、
昔の
着かしい堅爾様
堅爾が此の手紙を受取つたのは十二月の初

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6

めであつた。時子の手紙には住所も何にも書いて無かつた。堅雨は躍る胸を抑へながら、頼りない山里とやらは何所の事からうかと、頼りに封皮を瞻めたが生憎差出の局名が軽擦れて山、龍山の二字しか読めなかつた。

山……龍……と幾度も口の中で読返して見ては堅雨は嬉と膝とおつて、

和歌山……龍神……さうだ龍神温泉場だ！と思はず叫んだ。そして再び封印を視ると夫れが不思議にも和歌山、龍神、と明瞭読

今日は

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6

むすめが来た。そして其の切手が倒さまに貼られてある事にも漸と気がついた。堅剛は凝然と其の吸取紙の文字を視詰めてゐるうち、何とは無しに涙ぐんで来るのを覚えた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用